月刊 Acanthus
（土浦一高・土浦中学とその周辺の物語）
第１１４号　平成３０年７月１７日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰ　http:www.sin-syu.jp/

谷田部海軍航空隊
飛行科分隊
（『谷田部海軍航空隊記念碑建立にあたり　平成25年5月19日』〔財団法人筑波麓仁会〕より）

谷田部海軍航空隊本部
（『谷田部海軍航空隊記念碑建立にあたり』より）

戦時下の土浦中学生１５
～第一海軍航空廠・学徒たちの戦い５～　（霞ヶ浦その27）

1944（昭和19）年10月のレイテ沖海戦において、神風特別攻撃隊（敷島隊・大和隊・朝日隊・山桜隊の計24機）が初出撃して以降、特攻作戦が続けられました。そのため、第一海軍航空廠（一空廠）でも特攻機への改装作業や特攻機「桜花」の製作が行われ、学徒たちもその作業に従事しました。

引用文中の【　】内は筆者による注記です。

爆装工事

爆装工事とは、零戦などの特攻機に爆弾を抱える装置を取り付ける工事で、一空廠では、学徒たちによって爆装部品も作られていました。鉄板を切断し折り曲げてU字型とし、溶接加工して250kg爆弾懸架の枠を作る作業などでした。更に、学徒たちは一空廠から谷田部海軍航空隊へ出張し、そこでの特攻機への爆装工事にも携わっていました。

谷田部海軍航空隊は、1945年3月1日付けで、練習連合総隊の指揮下から、新たに編成された第十航空艦隊の下に置かれ、連合艦隊に編入されました。そのため、従来実施されてきた操縦要員の教育訓練は中断され、部隊は、教育訓練部隊から実戦部隊に変わりました。この第十航空艦隊は、沖縄作戦に投入する部隊でしたので、全国から特攻要員が集まり、整備の終わった飛行機を順に受領して、鹿屋・指宿・国分・串良などの九州各地の基地に進出し、順次出撃し散華していきました。

1945年6月14日に谷田部海軍航空隊へ出張した中45回栗栖三男は、その日の日記に次のように記しています。

「【作業の】準備して【海軍のネイヴィイブルーのトラックに乗り込み】出発は一一時半頃、到着は一二時一五分頃であった。零戦五〇番爆装作業。下士官に『君たちは何しに来たんだ、見学か』と言われ、『爆装作業に』と言うと『君達が……』と言って目を丸くしていた。工員と七機体に工事する。われわれの機体は夜の一一時頃完成。川上・篠田・野沢・小松・細田君らと布の上に朝五時頃まで寝てしまった。一五日は八時一五分航空隊を出て一空廠へ。（『戦いのなかの青春』）」

零戦への爆装工事は、簡単なようでとても難しい作業でした。250kgや500kgの爆装をすると、飛行機の重心が変わり、離陸できないことも出てきます。ここでは、重量計算をしてきちんと位置を決め、万全の対策を講じる必要がありました（爆弾は後で鹿屋などの出撃基地で取り付ける。）。爆装工事が終了すると、隊付きのテストパイロットが試験飛行し、合格となれば、それを16機単位（特別攻撃隊では、4機での1編制を基本とし、4の倍数機で編隊を組むことが多かった。）で特攻要員に引き渡しました。

谷田部海軍航空隊での爆装工事は、徹夜となることも多く、寝られたとしても格納庫の片隅で仮眠するくらいで、大変な作業でしたが、常に空腹を抱えていた学徒たちにとっては、夢のようなことがありました。中45回篠田康は、『戦いのなかの青春』に、次のように述べています。

「作業は爆装工事といって、零戦の特攻機に爆弾を抱える装置を取り付けるのだった。零戦の下面カバーを外して新規に爆装を設置するのだが、二泊三日の出張で、一回の旅費は十六～七円になる、然し今お金を貰っても何も買えないし、どうせ給料と一緒に通帳に振込まれるだけだが、それにしても高い金額だと思った。

この出張で何より嬉しかったのは、お金よりも【現物】給与のよかった事だ。食事のテーブルに着くと、銀シャリが山盛り盛ってあり久しく見ていないので、美しい女学生に逢った時のように、マブシく感じる。汁椀には豚汁がタップリ、お菜皿には切り身の焼き魚、漬物が付いて、お酒が一合、タバコが十本、それに大きな大福餅が付いているではないか。砂糖で小豆を煮た餡の入った正真正銘の大福餅だ。見ただけでジーンと胸が詰まった。軍隊から一般社会を指して娑婆というが、その娑婆では絶対に見る事の出来ない物ばかりだった。お米を始め砂糖、塩、醤油、味噌等全部統制品で酒タバコも配給でしか買えないのに、出張してきた我々未成年者にまで差別なく戴けるなんて素晴らしいと思った。お酒は飲んだが、タバコは皆のを集めて、一緒に付いて来てくれた指導員に上げた。寝床は航空隊の空き部屋か、格納庫の片隅にマットを敷いて、毛布にくるまって寝るのだ。マットの中間二ケ所が綴じてあり、その間がくびれて膨らんでいて、ラクダの瘤の上に寝ているようで、全く寝づらかったが、そのままグッスリ寝込んでしまい、目が覚めたら朝だった。」

○大（「桜花」）工事

一空廠では1945年に入ると、飛行機部第二工場の一角で、特攻機「桜花」の工事（一空廠では「マル大工事」と呼ばれていた。）が始まりました。

「桜花」は、機首部に大型の徹甲爆弾を搭載した小型の航空特攻兵器で、母機に吊るされて目的地まで運ばれ、目標付近で切り離された後、固形燃料㊟ロケットからガスを噴射させて加速し（ロケットの稼働時間は僅か30秒弱）、その後は搭乗員が操縦、滑空して目標に体当たりさせるものでした。この「桜花」工事を目撃した中45回高橋邦男は、『戦いのなかの青春』に、

「昭和二〇年に入って早々に、『丸大工事』なるものが、第二工場の一角を占めるようになった。【胴体は】ジュラルミン製の小さな物体【主翼は木製で、胴体後部には推進用の火薬ロケット3本を装備している。】は、飛行機の型はしているものの、人間一人がようやく入れる操縦席があるだけであって、操縦席の前部、機体の三分の一は、一屯爆弾を抱えるようになっていた。当時想像したのは、前部にそれだけの重量があっては、人間爆弾そのものであると思っていた。」

と書いています。

終戦までに「桜花11型」が755機生産され、そのうち55機が特攻に使用されま

した。最初から航空特攻兵器として開発され、実用化された兵器としては、世界唯一の存在と言われています。

神雷部隊

「桜花」の研究・開発は、既に1944年8月から始まっていました。海軍航空本部が航空技術廠に「桜花」（発案者大田正一海軍特務少尉の名前から「マル大」と呼ばれ、制式採用されると、「桜花」と命名された。）の研究試作を命じ、9月には試作1号機が完成し、直ぐに生産が始まりました。同時に搭乗員の募集が開始され、10月1日、第七二一海軍航空隊が、百里原基地（現在の茨城県小美玉市の航空自衛隊百里基地・茨城空港）で編成されました。この部隊は、特攻兵器「桜花」とこれを目標付近まで搭載・投下する母機・一式陸上攻撃機、これらを援護する零式艦上戦闘機、その他から成る特攻部隊で、通称「神雷部隊」と呼ばれました。この部隊は、同年11月7日に神ノ池（ごうのいけ）基地（現在の神栖市にあった。）に移転し、訓練を開始しました。「桜花」での滑空訓練は、当初から1人1回のみで、一式陸攻から投下された「桜花」を操縦し、滑走路に着陸しました。しかし、「桜花」には車輪がなく、着陸は底部に取り付けられた「橇」での滑走によるため事故が多く、殉職者も出ました。

「桜花」による特攻作戦は、1945年3月21日から同年6月22日まで、第一から第一〇桜花隊による計10回が、鹿児島県の鹿屋基地から沖縄周辺の米軍艦船に向けて実施され、55機の「桜花」が出撃しました。うち10機は母機の一式陸攻から発進できましたが、他は、発進できないまま母機諸共撃墜されてしまいました。駆逐艦一隻を撃沈し、駆逐艦三隻・掃海駆逐艦一隻に損傷を与えるに留まる一方、戦死者は、420名（「桜花」搭乗員が55名、一式陸攻搭乗員は365名）を数え、戦果の割には大きな犠牲が払われる結果となりました。

神ノ池基地跡に建つ「桜花錬成之地」碑（左）と鹿屋市野里基地跡の「桜花別盃之地」碑（右）いずれも揮毫は作家山岡荘八

「神雷部隊」の一式陸攻とその下に吊るされた桜花11型（『講談社オフィシャルウェブサイト』より）

特攻隊員との出会いと別れ

特攻作戦が頻繁に行われるようになると、学徒たちは、自分たちが爆装工事を担当した飛行機で特攻に赴く隊員たちと接する機会も出てきました。特攻隊員との出会いを中45回篠田康は、

「三度目に【谷田部海軍】航空隊に出張したのは、卒業【1945年3月、4年修了で繰り上げ卒業】して動員が延長になってからだった。青々と伸びた麦が、もう穂が出揃った頃だから五月の末か六月の初めかも知れない。

（略）

夕食は、今日も銀メシに豚汁、お酒が一合、タバコが十本、大福一ケだが、オカズはポークソティだったので、またまた大感激でした。豚汁に入っている【豚肉の】細切れでさえ、絶対に手に入らないのに、肉の塊が食べられるなんて全く夢のようでした。

（略）

その晩も相変わらず、三ツに膨らんだマットでやすんだ。翌日、爆装工事をしていると、飛行服姿の若い中尉がやって来て『これは私の愛機だ、皆さんご苦労さんシッカリお願いします。これで私もお国のご恩に報いることが出来ます』と笑顔で言うその言葉に、私は何と返事をしてよいのか、恐らく二十二～三才の若さではないかと思うが、その毅然たる立派な態度に、ただ黙って頭を下げるだけで、頭の中は真っ白になってしまった。（『戦いのなかの青春』）」

と綴っています。

一空廠で修理した損壊機も、特攻機として使われました。中45回廣瀬敏夫は、

「或る時、青年将校達が、『この機は特攻隊用に廻しますか』と話合っているのを、小耳に挟んだ時、爆装して、敵艦目がけて突入して行く特攻隊員が、こんな使い古した飛行機と、一緒に死んで行くのかと思い、愕然としたことが、決して頭から離れない。（『戦いのなかの青春』）」

と書き留めています。

米軍機による爆撃で工場が壊滅し、組立て用部品の入荷も減少してくると、仕事ができなくなってきました。そのため、女生徒たちは仕事のない時間に、隣接する霞ヶ浦海軍航空隊飛行場に特攻隊出陣の見送りに出向きました。彼女たちは涙も出ず、言葉も無く、ただ死出の途に出陣する魂に、ただただ手を振るのが精一杯でした。

1944年から1945年に掛けては、中45回生からも入隊者が続きました。「動員学徒の集い実行委員会」委員長渡邉光夫（中45回）は、入隊者について、次のように認（したため）ています。

「【昭和】19年4月1日に陸軍特別幹部候補生として越川弘君が、海軍甲種飛行予科練習生第14期前期生として篠山文夫、鈴木重男、中山福男の諸君が入隊し、6月1日には小生の君原小学校時代からの親友戸張禮記君が第14期後期生として入隊したのであった。更に狩谷・小吹・玉井・長南の諸君の海軍兵学校への入校、小松崎・酒寄・田中・松尾の諸君の陸軍士官学校への入校などがあり、その都度土浦駅前広場で『若鷲の歌』『同期の桜』『勝利の日まで』などから校歌『沃野一望数百里』まで肩を組み輪になって声を限りに歌い踊り、友の壮途を祝いながらも心中に別離の悲しみを湛えた見送りが続いたのである。戦局が本土決戦必至と見られた【昭和20年】5月31日には、やはり君原小学校時代からの親友栗山光夫君がやむにやまれぬ憂国の至情から敵艦への体当たりを目的とした陸軍船舶特別幹部候補生として入隊したのは小生にとって大きなショックであった。（『戦いのなかの青春』を回想するの記」東進会報第13号・平成11年4月1日）」

渡邉らに見送られ入隊した戸張禮記は、『戦いのなかの青春』に

「今にして思えば、一ヶ月違いで予科練と航空廠に分かれたことは、同級生が精魂込めて作った飛行機に乗り、敵艦目がけて体当たりするという、分かれ道にたっていたのである。これがわずか十六、七才の、我等少年少女たちの戦いであり、青春であったのである。」

と記しています。

(注) この固形燃料は、現在の北朝鮮咸興市にあった日本窒素肥料興南工場の中の主力工場・朝鮮窒素火薬興南工場で製造されていた。この工場の建設現場主任をしていた頼本雅雄は、以前には霞ヶ浦海軍航空隊にあった「押収格納庫」の組立てにも携わっていた。

※参考文献

『戦いのなかの青春』（戦後五十年　卒業五十周年　第一海軍航空廠動員学徒の集い記念誌）
『櫻水物語　戦中派の中學時代』（中48回・高1回　屋口正一）
『忘れ得ぬあの日あの時　敗戦～北朝鮮・興南からの脱出』頼本冨夫
『阿見と予科練』阿見町
『海軍航空隊ものがたり』阿見町

（高21回　松井泰寿）